

ユーザーレポート User Report

ゼロ
0の証明

家族を「監視役」という地獄から救い出した、ひとつの決断 関東のSさん家族が直面した「高齢親の飲酒運転」と再犯防止のリアル

個人

関東ののどかな町に住むSさん(仮名)の一家は、数年間にわたり、ある「見えない恐怖」に支配されていました。それは、70代になるお母様の飲酒運転問題です。「もし、母が子どもを轢いてしまったら……」そんな最悪の事態が頭をよぎり、夜も眠れない日々が続いていました。同じように親の「飲酒」と「運転」の狭間で悩む方々に向けて、Sさん一家がどのようにして平穏を取り戻したのか、その軌跡をご紹介します。

ご利用機器

カメラ付き
アルコールインターロック装置

ALC-ZERO II



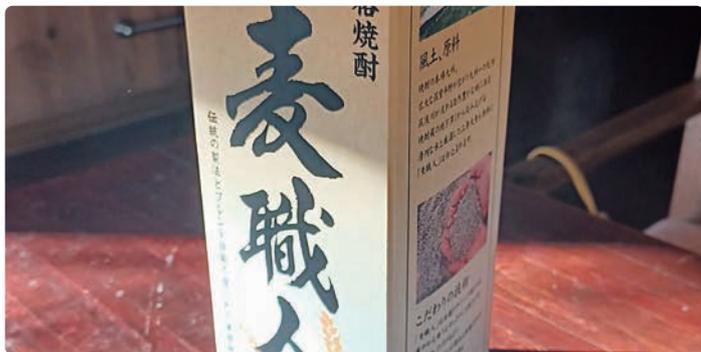
忍び寄る依存と、家族の限界

お母様の飲酒が次第にエスカレートしていった背景には、更年期障害や不眠、そして地方特有の孤独感がありました。最初は「眠るためのお酒」だったものが、やがて昼間から隠れて焼酎を飲む「隠れ飲酒」へと変わっていきました。

酔いが回ると、お母様は「自分は大丈夫」「誰も見ていない」といった根拠のない自信を持ち、ハンドルを握ろうとされます。理性が徐々に崩れていく状態でした。家族が注意をすると、今度はさらに隠れて飲むようになります。ゴミ袋の中から見つかる焼酎の空き瓶の数に、家族は絶望的な気持ちを抱く日々でした。

お酒を飲んでいる自覚があるにもかかわらず、「冷蔵庫が空だから」「あそこの店までならすぐだから」と、車を運転しようとする執着は、異常とも言えるものでした。

同居されている78歳のお父様も晩酌をされます。毎晩、麦焼酎をストレートで2杯ほど(約160cc)飲まれるそうです。それが結果的に、お母様の飲酒の引き金になっていました。高齢のお父様が、理性を失ったお母様を力づくで止めることには、明らかな限界がありました。



※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。

心因性から依存症へのスパイラル

お母様が飲酒運転に至った背景には、ある出来事を起点とした、深刻な依存症へのスパイラルがありました。

1 発端

ご自身の母親を亡くしたことをきっかけに、うつ病を発症されました。

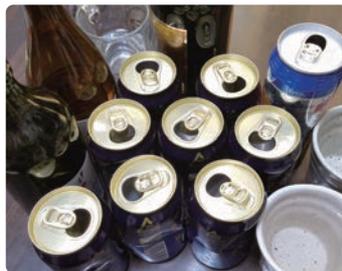
2 習慣化

心の不調を紛らわすため、ビールを2~3本飲む習慣が始まりました。

3 深刻化

加齢やアルコールの影響により「飲酒した事実を忘れる」状態となり、酩酊したまま車を運転して酒を買いに行くという、極めて危険な行動が明らかになりました。この事態は、2~3か月に及び精神科医療センターへの入院治療を必要とするほど深刻なものでした。

この一連の流れは、当初は心の不調への対処として始まった飲酒が、次第にコントロール不能な依存症へと移行したことを示しています。愛する人を失う悲しみや、加齢による心身の変化といった誰にでも起こり得る要素が、依存症へとつながる危険性をはらんでおり、この問題の根深さを物語っています。



※写真はイメージです

家族が抱えた葛藤

この危機的な状況に直面し、Sさんは深い精神的苦痛を抱えていました。それは、信頼してきた母親がアルコールによって変わっていくことへの悲しみと、有効な対策を打てない無力感でした。

最も直接的な対策である「車の鍵を取り上げる」という方法も検討されましたが、お父様(78歳)も同じ車を使用されているため、現実的には実行不可能でした。

お父様がお母様の前では飲酒を控えるなど、家族は懸命に協力体制を築いていました。しかし、依存症という病は、家庭環境の中で複雑に根を張ります。個人の意志や家族の愛情だけで、突発的かつ致命的なリスクを完全に排除することはできませんでした。

家の中には常に酒の匂いが漂い、注意すれば激しい口論になります。実家は、もはや安らげる場所ではなくなっていました。

ユーザーレポート

User Report

ゼロ
0の証明

個人

「田舎で車を奪うこと」の残酷さ

関東でも地方に行けば、生活は完全な車社会です。買い物一つ行くにも車が不可欠です。息子であるSさんは何度も「免許を返納してほしい」と訴えましたが、お母様にとってそれは「社会から切り離されること」を意味していました。

「危ないのは分かっている。でも、車がなければ生きていけない」安全のために自由を奪うのか、それとも自由のために命のリスクを抱えるのか。Sさんは、親を警察官のように監視し、鍵を隠し、疑い続ける生活に、心身ともに疲れ果てていました。

アルコールインターロックとの出会い。 家族の代わりに「NO」を言ってくれる装置

そんな限界の淵で出会ったのが、「アルコールインターロック」でした。「これを付けないなら、車を処分する」Sさんは強い決意でお母様を説得し、装置を導入しました。すると、驚くほど早く家庭内の空気が変わりました。「吹かなければ動かない」という、絶対的なルールができたのです。これまで繰り返されていた「飲んでいる」「飲んでいない」という感情的な争いはなくなり、機械が客観的に判断するようになりました。アルコールを検知すれば、エンジンはかかりません。感情を持たない機械に拒否されることで、お母様自身も次第に受け入れ、諦めがつくようになっていきました。



取り戻した日常

変わったのは「車の設定」だけではありませんでした。導入から数ヶ月。Sさんの家庭には、数年ぶりに穏やかな会話が戻ってきました。「一番変わったのは、私の心です」とSさんは語ります。「以前は電話をするたびに『今、飲んでいないか』と探るように話していました。でも今は、機械が止めてくれると分かっています。母を疑わなくていいということが、これほど心を軽くしてくれるとは思いませんでした。今では孫の話や、何気ない日常の話ができます。ようやく普通の親子に戻れた気がします」

お父様も、ご自身がお酒を飲む立場として、二人分の飲酒運転に「NO」を出してくれる存在があることに、安堵されていました。

※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。



※写真はイメージです

同じ悩みを持つあなたへ

高齢者の飲酒運転は、本人の意志や家族の愛情だけで解決できる問題ではありません。しかし、テクノロジーに「門番」の役割を任せることで、守れる命と、守れる家族の絆があります。家族が警察官になる必要はありません。

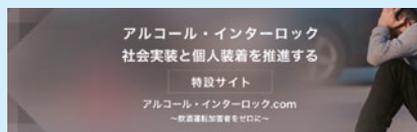
アルコールインターロックは、運転を奪うためのものではなく、安全に自立した生活を続けるための、家族へのギフトです。

この記事を読んだ方へのメッセージ

「うちも同じ状況かもしれない……」と感じたら、一人で抱え込まずにご相談ください。私たちは、あなたの家族が「監視」から解放され、笑顔を取り戻すお手伝いをしたいと考えています。

取材ご協力

家族を守る方法の手段として、
アルコール・インターロックを導入された
Sさんご一家



東海電子WEBサイト
【アルコール・インターロック.com】
<https://alcohol-interlock.com/>

LINE 公式アカウント

@700xyfip

大切な人の飲酒運転で
悩まれていたら…
いつでも LINE で
ご相談ください!

